小児の行動異常と乳児栄養方法との関連に関する研究

○木　村　三生夫（東海大学医学部小児科）
杉　森　美代子（　　〃　　）
伊　東　俊　一（　　〃　　）
牧　田　清　志（東海大学医学部精神科）
山　崎　晃　資（　　〃　　）
猪　股　丈　二（　　〃　　）
林　　雅　次（　　〃　　）
渥　美　真理子（　　〃　　）
松　田　文　雄（　　〃　　）
河　野　貴　子（　　〃　　）
大　塚　乙　子（神奈川県立厚木児童相談所）

Ⅰ はじめに

精神分析学の発達理論では，対人関係の基礎は早期母子関係の中で形成されると考えられており，"GOOD ENOUGH MOTHER"としての母親のかかわりが，幼児に適切な養育環境をあたえ，健康な精神発達を促し，自我の形成過程にも大きな影響をもつと思われる。我々の研究では，早期母子相互作用の重要な要素の一つである授乳行動と行動異常の発生との関連を検討しながら，精神発達における授乳行動の意味を探ろうと試み，行動異常児の授乳方法，その他の環境因子についてRETROSPECTIVEな調査を行なった。

Ⅱ 対象と方法

昭和５５年度は，東海大学病院精神科児童外来を訪れた行動異常のある子ども達1,074名（昭和５０年２月～昭和５５年８月）に対して，授乳行動，その他の環境因子に関するアンケート調査を行ない，３２９名の回答を得た。調査内容は，(1)年令，性別(2)妊娠時，分娩時，新生児期の状態について(3)授乳方法，授乳環境，養育者(4)発育状況，利き手(5)既往歴(6)産前産後の協力態勢(7)子どもの社会的状況(8)家族構成，住居についてである。

昭和５６年度には，保育園児３４７名，１歳６ヶ月健診を受診した子ども３５５名，計７０２名の健常児について，昭和５５年度と同様のアンケート調査を行なった。

正常対照群と，行動異常を示す各疾患群との比較検討はχ^2検定によって行なった。

Ⅲ 結　果

1. 行動異常児群の診断別分類

神経症的発症（３2.7％），自閉症（２9.3％）脳器質障害（１6.8％），精神遅滞（１0.2％），発達性言語障害（6.7％），その他（4.3％）となっている。

2. 授乳方法

母乳栄養，人工栄養，混合栄養に３分類して，各疾患群と正常対照群との比較検討を行なうと，脳器質障害群，自閉症群において，有意に母乳栄養が少なく人工栄養が多かった。その他の疾患群では，有意差が認められなかった。

3. 離乳開始時期、完了時期、離乳状況

発達性言語障害群で，離乳完了１０ヶ月未満が，正常対照群に比して有意に多かったが，その他の疾患群では"離乳"における偏りはみられなかった。

4. 周生期ＲＩＳＫ　ＦＡＣＴＯＲ

妊娠中については，正常対照群と各疾患群の間で，ＲＩＳＫ　ＦＡＣＴＯＲの頻度に有意差はみとめられなかった。分娩時については，すべての疾患群で，ＲＩＳＫ　ＦＡＣＴＯＲの頻度が高かった。新生児期については，脳器質障害群，精神遅滞群，自閉症群，神経症的発症群で，有意に

ＲＩＳＫ　ＦＡＣＴＯＲ　の頻度が高かった。

5. 出生順位、高年初産頻度

神経症的発症群，脳器質障害群の出生順位では，正常対照群に比し有意に第１子が多かった。高年初産頻度については，各疾患群とも，正常対照群との間に有意差をみとめられなかった。

6. 産前産後の協力態勢

産前産後の周囲の協力態勢について，行動異常を示す各疾患群で，正常対照群より父親の協力が多い傾向がみとめられた。

Ⅳ 考　察

自閉症群と脳器質障害群の授乳方法について，正常対照群に比し有意に母乳栄養が少なく人工栄養の多いことが明らかとなったが，自閉症には中枢神経系の何らかの器質要因が存在するという最近の知見を考慮すると，子どもの側の要因が，母乳栄養による授乳を妨げていることが推測された。神経症的発症群では，授乳方法の偏りはみられず，離乳開始時期，完了時期，離乳の難易度についても偏りをみとめなかった。すなわち〝授乳方法〟と〝離乳〟という母子相互作用の２因子と神経症的発症の相関関係はみとめられず，情緒発達における母子相互作用の意義を明らかにすることはできなかった。

授乳行動以外のいくつかの環境因子において，行動異常との相関関係がみとめられた。第１に，神経症的発症群で，分娩時，新生児期の周生期ＲＩＢＫ　ＦＡＣＴＯＲが多くみられた。これは，神経症的発症群において，明確な障害ではないが，吸乳力の悪さ，頻回の発熱など，何らかの一般的な障害が，周生期に存在し，母親が対応する際，〝とり扱いにくい子ども〟であったのではないかと推測される。子どものこのような〝とり扱い難さ〟は，母親の養育態度にも，大きな影響を及ぼすであろうと思われた。第２に，神経症的発症群で，第１子が多くみとめられた。子供が第１子であれば，母親は育児について未経験であり，〝ＭＯＴＨＥＲＩＮＧ〟を行う〝親として〟の能力が未熟であると考えられ，早期母子相互作用には，マイナスの因子として働くだろうと思われる。いくつかの文献ですでに明らかとなっているように，第１子における母子関係は，情緒発達上に大きな影響を与えると考えられており，神経症的発症との相関の意義は大きいと思われた。

今回の研究はＲＥＴＲＯＳＰＥＣＴＩＶＥな方法を用いて早期母子相互作用の問題を考えてきたが，今後は，ＰＲＯＳＰＥＣＴＩＶＥな方法を用いて，母子相互作用を示す因子を探りながら，その全体像について継時的に検討していきたいと考えている。

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

Ⅰはじめに

精神分析学の発達理論では,対人関係の基礎は早期母子関係の中で形成されると考えられており,“GOOD ENOUGH MOTHER”としての母親のかかわりが,幼児に適切な養育環境をあたえ,健康な精神発達を促し,自我の形成過程にも大きな影響をもつと思われる。我々の研究では,早期母子相互作用の重要な要素の一つである授乳行動と行動異常の発生との関連を検討しながら,精神発達における授乳行動の意味を探ろうと試み,行動異常児の授乳方法,その他の環境因子について RETROSPECTIVE な調査を行なった。